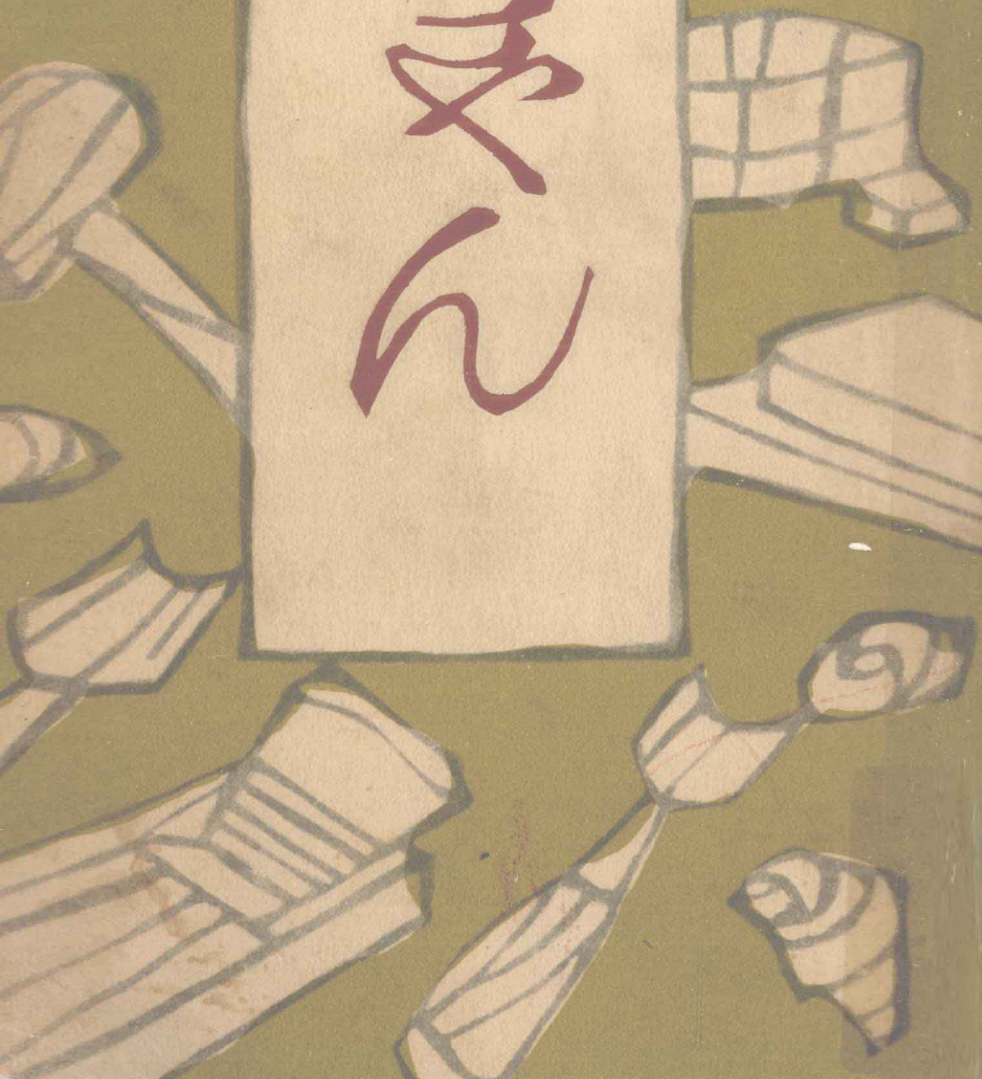
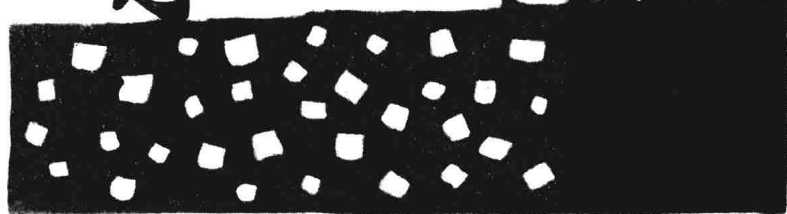


あん



友人著
山本國五郎
刊



ちゃん

著者の了解に
より検印廃止

昭和34年3月30日 第1刷発行 頁 260

著 者 やま もと しゅう ご ろう
山 本 周 五 郎

東京 都 文 京 区 音 羽 町 3-19
発 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 (株) 文 弘 社

発行所 東京都文京区 株式 講 談 社
音羽町 3-19 会社
振替東京 3930 電話 (94) 大代表 3111

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。(大進堂製本)

© Shugoro Yamamoto 1959

目次

ちゃん	五
月夜の眺め	四五
ちいさこべ	七三
凍てのあと	二九
ひとでなし	一六五
深川安楽亭	一九五

装
幀
芹
沢
銑
介

ち

や

ん

ち

や

ん

その長屋の人たちは、毎月の十四日と晦日みそかの晩に、きまって重さんのいさましくだを聞くことができた。

云うまでもないだろうが、十四日と晦日は勘定日で、職人たちが賃銀を貰う日であり、またこれらの家族たちが賃銀を貰って来るあるじを待っている日でもあった。

その日稼ぎの者はべつとして、きまった帳場で働いている職人たちとその家族の多くは、月に二度の勘定日をなによりたのしみにしていた。夕餉ゆうぐの膳には御馳走が並び、あるじのためには酒もつくであらう。

半月のしめくりをして、子供たちは明日なにか買って貰えるかもしれない。もちろん、いずれにしてもささやかなはなしであるが、ささやかなりにたのしく、僅かながら心あたたまる晩であった。

こういう晩の十時すぎ、ときにはもっとおそく、長屋の木戸をはいつて来ながら、重さんかくだを巻くのである。

「銭なんかない、よ」と重さんがひと言ずつゆっくりと云う、「みんな遣つかっちゃった、よ、みんな

な飲んじまった、よ」

酔っているので足がきまらない。よろめいてどぶ板を鳴らし、ごみ箱にぶつつかり、そしてしゃっくりをする。

「飲んじやった、よ」と重さんは舌がだるいような口ぶりで云う、「銭なんかありゃあしない、よ、ああ、一貫二百しか残ってない、よ」

長屋はひっそりしている。重さんは自分の家の前まで、ゆっくりとよろめいてゆき、戸口のところまでへたりこんでしまう。すると雨戸をそっとあけて、重さんの長男の良吉か、かみさんのお直が呼びかける。

「はいっておくれよ、おまえさん」と、お直なら云う、「ご近所へ迷惑だからさ、大きな声をださないではいっておくれよ」

喉で声をころして云うのだ。

「ちゃん、はいんなよ」と良吉なら云う、「そんなところへ坐っちまっちゃだめだよ、こっちへはいんなったらさ、ちゃん」

「はいれない、よ」重さんはのんびりと云う、「みんな遣っちゃったんだから、一貫二百しか残ってないんだから、ああ、みんな飲んじまったんだから、はいれない、よ」

長屋はやはりしんとしている。まだ起きているうちもあるが、それでもひっそりと、聞えないふりか寝たふりをしている。――

長屋の人たちは重さんと重さんの家族を好いていた。重さんもいい人だし、女房のお直もいいかみさんである。十四になる良吉、十三になる娘のおつき、七つの亀吉と三つのお芳。みんな働き者であり、よくできた子たちである。

重さんがそんなふうにくだを巻くのは、このところずっと仕事のまが悪いからで、そのために
お直や良吉やおつぎが、それぞれけんめいに稼いでいるし、ふだんは重吉もおかしいほど無口で
おとなしい。だから長屋の人たちは黙って、知らないふりをしているのであった。

たいていの場合、お直と良吉で、重さんの片はつく。しかし、それでも動かないときには、末
の娘のお芳が出て来る。三つになるのに口のおそい子で、ときどき気取って舌っ足らずなことを
云う。

「たん」もちろん父ちやんの意味である、「へん」云ってゆでしよ、へんな、たん」

二

重吉のまわりで、冬は足踏みをしていた。

季節はまぎれもなく春に向っていた。霜のおりることも少なくなり、風の肌ざわりもやわらい
できた。梅がさかりを過ぎ、沈じん花ちやうけが咲きはじめた。歩いていると、ほのかに花の匂いがし、そ
の匂いが、梅から沈花にかわったこともわかる。――

けれども、そういう移り変りは重吉には縁が遠かった。いま、昏れがたの街を歩いている彼に
は、かすかな風が骨にしみるほど冷たく、道は凍こでているように固く、きびしい寒さの中をゆく
ように、絶えず胸むねぶるいがおそってきた。

灯のつきはじめたその横町の、一軒の家から中年の女が出て来て、火のはいった行灯あんどんを軒に掛
けた。行灯は小形のしゃれたもので、「お蝶」と女文字で書いてあった。

「あら重さんじゃないの」と女が呼びかけた、「どうしたの、素通りはひどいでしよ」

重吉の足がのろくなり、不決断にゆっくりと振返った。

「お寄んなさいな、新さんも来ているのよ」

「しんさん、——檜物町か」

「金六町、新助さんよ」

女がそう云ったとき、家の中から男が首を出して、よう、と声をかけた。

「久しぶりだな、一杯つきあわないか」

「うん」と重吉は口ごもった、「やってもいいが、まあ、この次にしよう」

「なに云ってんの」と女がきめつけた、「それが重さんの悪い癖よ、いいからおはいんなさい、さあ、はいってよ」

女は重吉を押しいれた。そうして、戸口の表に飾り暖簾のれんを掛けてから、中へはいってみると、新助が独りで盃をいじっていた。

「手を洗いに奥へいったよ」と彼は女に云った、「しかし、どうしたんだ、お蝶さん」

お蝶と呼ばれた女はこの店のあるじだろう。土間をまわって台の向うへはいり、おでんの鍋を脇にして腰をおろした。それは三坪足らずの狭い店で、台囲がこいに向って板の腰掛がまわしてあり、土間のつき当りにある暖簾の奥は、女あるじの住居と勝手になっているようだ。

「どうかしたのか」と新助は暖簾口のほうへ顎をしゃくった、「それが悪い癖だって、——どういうことなんだ」

「なんでもないの」お蝶はそう云って、おでん鍋に付いている銅壺どうこから燗徳利かんてりを出し、ちょっと底に触ってみてから、はかまへ入れて新助の前に置いた、「熱くなっちゃったわ、ごめんなさい」
「そうか」と新助はうなずき、くすつと笑って云った、「あいつらしいな」

「なにがよ」

「こっちのことだ」と新助は云った、「しかし、断っておくが、今日の勘定はおれが払うからな、あいつに付けたりすると怒るぜ」

お蝶はうしろへ振り返り、大きな声で呼んだ、「おたまちゃん」

奥からもうすぐですという返辞が聞え、暖簾口から重吉が出て来た。

新助は重吉に場所をあけてやり、そうして二人は飲みはじめたのだ。やがて、おたまという女があらわれ、お蝶は代って奥へはいったが化粧を直して戻ると、店には新しい客が二人来ていた。――

日本橋おとわ町のその横町は、こういった小態^{こてい}な飲み屋が並んでおり、どの店にも若い女が二人か三人ずついて、日がくれると三味線や唄の声で賑やかになる。このときもすでに、近くの店から三味線の音が聞えはじめ、まもなくお蝶の店にも幾人か客が加わって、腰掛はほとんどいっぱいになった。

「檜物町に会ったか」

それまでの話しがとぎれたとき、ふと調子を変えて新助がきいた。

「いや」と重吉は首を振った。

「話しにゆくって云ってたんだがな、うちのほうへもいかなかったか」

重吉はまた首を振った、「来ないようだな、なにか用でもあるのか」

「うん」新助は云いよどみ、爛徳利を取って重吉にさした、「まあ一つ、――おめえ弱くなったのか」

「檜物町はおれになんの用があるんだ」

「かさねるよ」新助は酌をしてやった、「このまえからおれと檜物町とで話していたんだ、長沢町、——つまりおめえと檜物町とおれは、一つ釜の飯を食って育った人間だ」

新助は本店の「五桐」の話をした。

日本橋両替町にあるその店は、五桐火鉢という物を作っている。いまは三代目になるが、先代のころまでは評判の店であつた。さしわたし尺二寸以上の桐の胴まわりに、漆と金銀で桐の葉と花の蒔絵をした火鉢で、その蒔絵の桐の葉が五枚ときまつているため、五桐火鉢と呼ばれるのであり、作りかたに独特のくふうがもちいられていて、ほかにまね手のないものと珍重されていた。

かれら三人はその店の子飼いの職人であつた。重吉が一つ年上、新助と真二郎はおない年だったが、五年ばかりまえ、新助と真二郎は「五桐」からひまをとり、片方は京橋の金六町、片方は檜物町に、自分たちの店を持った。

二人は五桐火鉢にみきりをつけたのだ。先代までは珍重されたが、時勢が変るにつれて評判も落ち、注文がぐんぐん減りだした。五桐の品を模した安物がふえたとし、世間の好みも違つてきたのであろう。手間賃を割つて値をおとしても、売れる数は少なくなるばかりであつた。——

これでは店がもちきれないので、五桐でもやむなく新しい火鉢に切替えたが、名目だけは残したいので、重吉が一人だけ、元どりの火鉢を作つていた。新助はそのことを云いだしたのだ。もう三十五にもなり、子供が四人もあり、職人として誰にも負けない腕をもっているのに、長屋住いで、僅かな手間賃を稼ぎにかよつてゐる。もうそろそろ自分の身のことを考えてもいいころではないか、と新助は云つた。

重吉は飲みながら聞いていた。なにも云わないが、飲みかたが少しずつ早くなり、お蝶か新助

が酌をしないと、手酌で飲んだ。

「心配してくれるのはありがてえが」と重吉はやがて云った、「おれにはいまの仕事のほかに、これといってできることはなさそうだ」

「それで檜物町と相談したんだ」

「まあ待ってくれ」

「いいからこっちの話を聞けよ」と新助が遮^{さへず}って云った、「それはおめえが五桐火鉢を守る気持はりっぱだ、けれども世間ではもうそれだけの値打は認めてくれない、あの蒔絵のやりかた一つだって、漆の下地掛けから盛りあげるまで、まる九十日もかけるといふのはばかげている、木地の木目の選び、枯らしぐあい、すべてがそうだ、すべてがあんまり古臭いし、いまの世には縁の遠い仕事だ」

「重さん」と新助は続けた、「おらあ、はっきり云うが、ここはひとつ考え直してくれ、時勢は変ったんだ、いまは流行が第一、めさが変わっていて安ければ客は買う、一年使ってこわれるか飽きるかすれば、また新しいのを買うだろう、火鉢は火鉢、それでいいんだ、そういう世の中になったんだよ」

三

新助は一口飲んでまた云った。

「おめえが脇眼もふらず、丹精^{たんせい}こめて作っても、そういう仕事のうまみを味わう世の中じゃあないし、またそんな眼のある客もいなくなった、このへんで時勢に合った仕事に乗り替えようじゃ

ないか、その気になるなら、檜物町とおれがなんとでもするぜ」

重吉は弱よわしく唇で笑った、「火鉢は火鉢か、そりゃあそうだ」

「おれたちは三人いっしょに育った、檜物町とおれはどうやら店を持ち、どうやら世間づきあいもできるようになった、いまならおめえに力を貸すこともできる、こんどはおめえの番だ、このへんでふんぎりをつけなくちゃあ、お直さんや子供たちが可哀そうだぜ」

重吉は持っている盃をみつめ、それから手酌で飲んで、ゆっくりと首を振った。

「友達はあるがてえ」と彼は低い声で云った、「友達だからそう云ってくれるんだ、うん、考えてみよう」

「わかってくれたか」

「わかった」と重吉はうなずいた、「おめえに云われて、よくわかった」そして彼は急に元気な口ぶりになった、「——じつを云うとね、両替町の店でも、あんまりおれに、仕事をさしてくれなくなっただ、むろんそいつは、売れゆきの悪いためだろう、待ってたひにゃあ買いに来る客もねえから、おれが自分で古いとくいをまわって、注文を取ってくるっていう始末なんだ」

「自分でだって、——おめえがか」

「恥ずかしかったぜ、いまは馴れたけれども、初めは恥ずかしくって、汗をかいたぜ」重吉は手酌で二杯飲み、空になった盃をじっとみつめた、「いまは馴れた、けれどもな、おめえの云うとおりだ、もう三十五で、女房と四人の子供をかかえてるんだ、このままじゃあ、女房子が可哀そうだからな」

「その話し、もうよして」とお蝶がふいに云った、「お酌をするわ、重さん、酔ってちょうだい」「ちょっと待てよ」と新助が云った、「まだこれから相談があるんだ」